

B-1 名詞述語を伴う繰り上げ構文としての人魚構文

田口 智大

エジンバラ大学／奈良先端科学技術大学院大学

概要

Tsunoda (2020) では、人魚構文 (mermaid construction) は、隣接する動詞と名詞述語が文法化を経て複合述語を構成している、単節の構文であるとされている。しかし、同研究では複合述語の定義が不十分であり、理論的分析が不足している。そこで、本研究では、典型的な人魚構文は名詞述語を伴った繰り上げ構文 (raising construction) として扱うべきであると主張する。この分析は、次の三点から裏付けられる。第一に、人魚構文は、繰り上げ構文の判断基準となる統語的テストに通ることができる。第二に、Tsunoda (2020) での分析の根拠は、繰り上げ構文として分析することによっても説明することができる。第三に、人魚構文は、繰り上げ構文の文法化の特徴とも合致することから、通時的な観点からも繰り上げ構文の一部に位置付けることが可能である。また同時に、本研究は、名詞述語の繰り上げ構文という新たな繰り上げ構文の類型を提示する。

1 はじめに

1.1 人魚構文の概略

人魚構文とは、体言締め文とも呼ばれ、節の直後に名詞とコピュラが後続し、節では動詞述語文の構造を持ちながら、節の外は名詞述語文の構図を持つような構文である [15]。以下の (1) に日本語における例を示す。(1) では、全体として名詞述語文であるかのように見えるが、「花子が」は名詞述語「予定だ」の意味上の主語ではなく、動詞「行く」の主語である。このように、人魚構文には主語と名詞述語の間の関係に不一致があるのが特徴である。機能面で見れば、人魚構文では、任意の動詞と特定の名詞（本稿では人魚構文名詞と呼ぶ）、そして言語によっては繫辞が結合し、その動詞に時制、アスペクト、モダリティ、証拠性といった機能的な意味を与えている。このような人魚構文名詞は、日本語では百を超える名詞が報告されている。また、日本語の他にも、アジアの SOV 言語を中心に、語族を問わず広く確認されている [14]。各言語における人魚構文の例を、(2) から (11) に示す。なお、(11) のロシア語の例は先行研究で報告されているものではないが、本稿ではおそらく人魚構文に属するものとして記述する。

(1) [花子が名古屋に行く] 予定だ。

(2) *kai=ga=du sac=n idi-r kutu.*

3SG=NOM=FOC first=DAT go_out-ADN.NPST thing

「彼（女）が先に行くべきだ」（伊良部島方言<宮古語<琉球語群<日琉語族） [12]

(3) *chinkwu=nun ilpon=ey ka-l yeyceng=i-ta.*

friend=TOP Japan=DAT go-ADN.PROS plan=COP-DECL

「友達は日本に行く予定だ」（朝鮮語<朝鮮語族） [9]

(4) *arja=kə nor ptsəŋ-ju ntʰarzə re.*

father=ERG yak sell.IPFV-NMLZ.GEN plan COP.B

「父がヤクを売る予定だ」（アムド・チベット語<チベット・ビルマ語派<シナ・チベット語族） [1]

(5) *tù dì híN=gò sá=dê póUN(=bé)*

3SG this curry=KO eat=ADN shape(=EMP)

「彼がこのカレーを食べたようだ」（ビルマ語<チベット・ビルマ語派<シナ・チベット語族） [7]

(6) *a:s-hi: tamba-s-in ilc-ka: caqde: rahc-a:*

3SG.M-GEN own.father-M-ACC fear.PS-PST.VADJ necessity COP.PS-PST.3SG.NM

「彼が父を恐れていたからであった」（クルク語<北部ドラヴィダ語派<ドラヴィダ語族） [10]

(7) *íse faraššó guluf-f-annó gara-a=ti.*

3SG.F.NOM horse.ACCOBL ride-3SG.F-IPFV.3 manner-LV=NP.C.PRED.MOD

「彼女は(習慣的に)馬に乗るようだ」(シダーマ語<クシ語派<アフロアジア語族) [8]

(8) *plano ni=Noy na b<um>isita sa=Davao bukas.*

plan GEN=Noy LK visit<AF:INF> OBL=Davao tomorrow

「ノイは明日ダバオに行く予定だ」(タガログ語<マレー・ポリネシア語派<オーストロネシア語族) [6]

(9) *tar tokio=te jawar kɔt^ha.*

3SG.GEN Tokyo=LOC go.NMLZ.GEN word

「彼は東京に行くことになっている」(ベンガル語<インド・イラン語派<インド・ヨーロッパ語族) [5]

(10) *miya joqla-rɣa waqit.*

1SG.DAT sleep-INF time

「(そろそろ)寝る時間だ」(タタール語<キプチャク語群<テュルク語族) [13]

(11) *nam pora pogovorit'.*

1PL.DAT time PF:talk:INF

「(そろそろ)話し合う時間だ」(ロシア語<スラヴ語派<インド・ヨーロッパ語族)

1.2 繰り上げ構文の概略

(主語から主語への)繰り上げ構文 (subject-to-subject raising; SSR) とは、(12) や (13) のように、非定形動詞 (non-finite verb) 節中の主語が主節の主語の位置へと繰り上げられている構文である。繰り上げられた主語の意味役割は、従属節の述語によって付与されている。このような繰り上げ構文を引き起こす述語は典型的に動詞や形容詞であることが知られており、Langacker (1995) は、(14) に挙げられるような語が SSR 構文に用いられうとしている [11]。なお、一般的に SSR 構文を指す場合、助動詞は含めない。機能面では、*seem* のような証拠性 (evidentiality) や、*begin* のようなアスペクトに関わる点が共通している。De Haan (2007) は、SSR 構文に共通する役割は主観化 (subjectification) であると特徴づけている [2]。

(12) *John_i seems [t_i to leave].*

←

(13) *John_i is likely [t_i to leave].*

←

(14) a. 助動詞: *may, will, must, can, used to*

b. 形容詞など: *sure, certain, liable, (un)likely, apt, bound, destined, supposed, set, gonna, about*

c. 動詞: *seem, appear, tend, chance, turn out, prove, happen, fail, begin, start*

2 先行研究

角田 (2011, 2012) は、(1) の括弧内の句の述語と名詞述語が (1) の下線部のように複合述語 (compound predicate) を成すような単節の構造を有しており、(1) の括弧内の句は連体修飾節ではないと主張している [15, 16]。より一般的に言えば、典型的な人魚構文は共通して [[Clause] N Cop] の形式を取るとし、Clause は定形 (finite) の文として用いられるとしている [14]。その根拠として、連体修飾節では (15) のように主題のハを用いることはできないこと、(16) のように節を名詞修飾節と見た場合に可能であるはずのガ・ノ交替が不可能であることや、(17) のように内部の句の述語と名詞述語の間に修飾語が挿入できないことなどを挙げている。

(15) 花子{*は/が/の}書いた本

(16) 花子{は/が/*の}名古屋に行く予定だ。

(17) *花子が名古屋に行く急な予定だ。

人魚構文が複合述語を構成しているという分析の利点は、名詞が文法化を経て機能語となり、接語や接辞へと変化していくという通時的分析 [4] と相性が良いことである。一方で、共時的な分析に際して、この「複合述語」は定義が不十分な概念であるため、形態統語理論を用いた分析に向いていない。さらに、後の節で示すように、主語の格標示を根拠として連体修飾節を否定する主張には問題がある。これを踏まえて、本研究では、人魚構文が共時的にも通時的にも名詞述語による繰り上げ構文の一種として位置付けられることを示す。

3 繰り上げ構文としての人魚構文：共時的分析

本節では、統語的観点から、人魚構文が繰り上げ構文の一種として扱うことができることを論じる。まず、日本語や英語の例を中心として、日本語の人魚構文が繰り上げ構文の基準を満たすことを立証する。次に、人魚構文を持つ他の言語でも同様の分析が可能であることを示す。

3.1 繰り上げ構文のテスト

まず、人魚構文名詞を繰り上げ構文の述語として扱った場合、日本語の例文 (1) において、主語は (18) のように移動していると考えられる。

(18) 花子が_i [_{t_i} 名古屋に行く] 予定だ。

この論拠として、人魚構文は繰り上げ構文かどうかを判断するテストを通ることができることを挙げる。繰り上げ構文かどうかの基準となる代表的なテストは、受動文にしたときに参与者の意味役割が変化していないかどうかを確かめるものである。英語での例として、(19) と (20) を比較したとき、動作主としての *John* と被動作主としての *the vase* の関係は変化していないため、繰り上げ構文であると言える。他方で、主動詞を *try* に置き換えた場合の (21) と (22) では、参与者の意味役割が同一ではないことがわかる。この場合の *try* はコントロール構文の動詞であり、繰り上げ構文ではない。

(19) *John seems to break the vase.*

(20) *The vase seems to be broken by John.*

(21) *John tries to break the vase.*

(22) *The vase tries to be broken by John.*

繰り上げ構文と同じく、日本語の人魚構文の (23) と (24) では、受動化を経ても意味役割が変化していない。すなわち、繰り上げ構文と同様の受動化テストを通過している。

(23) 花子が [太郎を叩く] 予定だ。

(24) 太郎が [花子に叩かれる] 予定だ。

もう一つの繰り上げ構文の判断基準は、慣用句を繰り上げ構文にした際に慣用句本来の意味が保たれているかどうかである。*The cat is out of the bag* は、秘密が暴露されているさまを表す英語の慣用句であるが、この文を *seem* を用いて (25) のように繰り上げ構文とした場合でも、慣用句の意味を保持している。しかしながら、コントロール構文の動詞である *try* を (26) のように用いた場合、慣用句の意味は失われ、字義通りの解釈のみが可能となる。人魚構文でも同様に、例文 (27) に示すように、「足が棒になる」(足腰が非常に疲れる) という慣用句は、人魚構文名詞「見込み」を用いた場合でも慣用句の持つ特殊な意味は保たれたままである。これらのことから、人魚構文は SSR 構文と類似した特徴を持つと言える。

(25) *The cat seems to be out of the bag.*

(26) # *The cat tries to be out of the bag.*

(27) 足が [棒になる] 見込みだ。

このように人魚構文を繰り上げ構文の一種として分析することで、(16)に見られるような制約も説明することができる。(16)では、人魚構文において主語のガ・ノ交替が不可能であることを示しているが、これは連体修飾節の主語が主節に繰り上がっているため、主格としてノ格を取ることができないと説明できる。そして、(17)のように、人魚構文名詞が形容詞修飾されることができないことは、人魚構文を取りうる述語の構造が $[N_{MC} Cop]^{PredP}$ であって、 $[NP Cop]^{PredP}$ ではないとすれば説明できる。なお、ここで N_{MC} は人魚構文名詞を指す。このことは、人魚構文の述語を構成できる名詞は極めて選択的であるという事実から裏付けられる。

人魚構文を繰り上げ構文として扱う場合、繰り上げ構文の従属節が非定形であるのと同様、人魚構文の従属節 (2節における Clause) も非定形であるはずである。つまり、日本語文法で言えば、終止形とはならない。このことは、Tsunoda (2020: 4) が人魚構文の特徴として挙げている、 $[[Clause] N Cop]$ の Clause が定形の文として用いられることができる、という仮説と反する。しかし、繰り上げ構文として分析することで、1.1 節で列挙した例文に見られるように、通言語的に人魚構文の従属節の述語が非定形であるという事実と一致する。この点は次節で詳しく述べる。

3.2 通言語的分析

次に、本節では、人魚構文を繰り上げ構文の一種として扱う分析を他の言語にも適用し、この分析の有効性を確認する。1.1 節で列挙した各言語の例について、従属節の動詞に着目すると、連体形型 (日本語、伊良部島方言 (2)、朝鮮語 (3)、ビルマ語 (5)、シダーマ語 (7)*¹)、動名詞型 (アムド・チベット語 (4)、ベンガル語 (9))、不定詞型 (タガログ語 (8)、タタール語 (10)、ロシア語 (11)、動形容詞型 (クルク語 (6)) の四つに分類することができる。また、繰り上げられた主語の格標示に注目すると、主格系型 (日本語、伊良部島方言、朝鮮語、アムド・チベット語、ビルマ語、シダーマ語、タガログ語*²)、属格系型 (クルク語、タガログ語、ベンガル語) 与格系型 (ロシア語、タタール語) の三つに再分類することができる。このように、人魚構文に用いられる動詞の形態や格標示は、各言語の間でばらつきが見られる。しかし、どの言語においても、構文に埋め込まれる句は独立した文として用いられることができるような句ではないという点で共通している (例外については後述)。また、繰り上げられた従属節の主語の表層的な格標示は、主節の人魚構文名詞を伴う述語によって付与されているために、バリエーションが生じていると考えることができる。これらの観察から、人魚構文の構造について、(29) のような定式化を仮定することができる。なお、言語の語順によって、同一句内の各要素の順番は変わりうる。

(29) 人魚構文の統語的構成

- | | |
|--|--------------------------|
| 1. $[NP_{SUBJ} PredP]^{IP}$ | … 基底 |
| 2. $[NP_{SUBJ} PredP]^{IP} + [N_{MC} (Cop)]^{PredP}$ | … 人魚構文名詞 (および繫辞) を付加 |
| 3. $[NP_{SUBJ_i} [t_i PredP] [N_{MC} (Cop)]^{PredP}]^{IP}$ | … 基底の節は従属節となり、主語は主節へ繰り上げ |
| 4. $[NP_{SUBJ_i} [t_i PredP] [N_{MC} (Cop)]^{PredP}]^{IP}$ | … 表層の形態的格を付与 |
- ←————— case

とはいえ、人魚構文を繰り上げ構文として扱う分析では、Tsunoda (2020) が挙げている $[[Clause] N Cop]$ の典型から逸れた周辺的な現象を説明することができない。例えば、Kato (2020) はビルマ語の人魚構文の中には、(30) のように接語化した名詞を用いるものがあることを報告している。本稿で提案する分析は、人魚構文名詞が形態統語的に独立した名詞であることを前提としているため、このような現象までカバーすることができない。つまり、名詞とし

*¹ シダーマ語の連体節の動詞の形式は定形と同様であるが、その機能は連体形であると判断して分類した。

*² タガログ語の一部の不定詞型人魚構文では、(28) のように主格主語を取ることが報告されている [6]。

(28) *kapalaran-g ma-wala si=Pilar sa=Maynila.*
fate-LK AF:INF-disappear NOM=Pilar OBL=Manila
「ピラルはマニラで道に迷う運命だ」

ての機能から文法化を経て、接語や接辞となっている構文は、共時的には繰り上げ構文でない別の構造を持ったものとして扱う必要がある。しかし、繰り上げ構文は (14) に挙げたように助動詞と深い関係があることから、通時的には連続的な現象として扱える可能性がある。

- (30) [tù dì hín=gò sá=dǎ]=lò(=bÉ)
 3SG this curry=KO eat=ADN=like(=EMP)
 「彼はこのカレーを食べたようだ」

繰り上げ構文で説明することができないもう一つの点は、Katagiri (2020) で言及されているように、タガログ語における人魚構文名詞 *mukha* が定形の述語（例文 (31) の太字部分）を伴う点である [6]。*mukha* は本来「顔」を意味する名詞であり、この構文において述語として用いられている*³。このケースでは、主語の *si=Noy* が繰り上げられたものであるという直接的根拠はないため、さらなる議論を要している。

- (31) *mukha-ng* [**bi-bisita** si=Noy sa=Davao bukas].
 face-LK AF:CONT-visit TOP=Noy OBL=Davao tomorrow
 「ノイは明日ダバオに行くようだ」 [6]

このように、助動詞化・接語化・接辞化した名詞を伴う人魚構文や、タガログ語の *mukha* を用いた人魚構文などの例外的な場合を除けば、[[Clause] N Cop] 型の典型的な人魚構文の構造は、通言語的に繰り上げ構文の一部として扱うことができる。このことは、次の二点を示している。第一に、繰り上げ構文は動詞述語あるいは形容詞述語が引き起こすことが経験的に知られているが、名詞述語も繰り上げ構文を持ちうる。第二に、繰り上げ構文の従属節は不定詞であることが一般的であるが、名詞述語の繰り上げ構文の場合、多様な非定形の従属節を持ちうる。名詞は連体修飾節や動名詞節による修飾が可能であることから、このような多様性が生じていると考えられる。

4 繰り上げ構文としての人魚構文：通時的分析

最後に、人魚構文は、共時的な統語構造のみならず、通時的な文法化プロセスにおいても繰り上げ構文と類似した性質を持っていることを論じる。本節では、Heine & Kuteva (2002) と Hopper (2003) がそれぞれ挙げている文法化の特徴に基づいて、SSR 構文と人魚構文が同様の文法化の度合いにあることを示す。

4.1 Heine & Kuteva (2002) による文法化の四つのメカニズム

Heine & Kuteva (2002) は、文法化現象が典型的に持つ特徴として、以下の四つを挙げている [3]。

1. 脱意味化 (desemanticization)：意味内容の喪失
2. 分布拡張 (extension, context generalization)：新たな文脈での使用
3. 脱範疇化 (deategorialization)：形態統語的特徴の喪失
4. 音形縮約 (erosion, phonetic reduction)：音声的実体の喪失

ここでは、この四点の特徴を基準に、SSR 構文と人魚構文の文法化の程度を比較する。まず、*appear* のような述語は、SSR 構文の述語として用いられた場合、本来の「現れる」という語彙の意味を喪失していることから、脱意味化を経ていると言える。人魚構文でも同様に、「予定だ」や「見込みだ」といった名詞述語が人魚構文で用いられた場合、本来の名詞の意味は喪失している。したがって、SSR 構文と人魚構文はどちらも脱意味化を被っている。そして、本来の意味を喪失した代わりに、証拠性やアスペクトといった機能的役割を果たすようになってきていることから、分布拡張はどちらの構文にも共通している。他方で、SSR 構文の述語は動詞や形容詞としての形態統語的特徴を保っており、人魚構文においても述語は名詞のままであるから、どちらも脱範疇化には当てはまらない。また、SSR 構文

*³ *mukha* が副詞ではなく名詞述語の役割を保っているという議論は Katagiri (2020) を参照されたい。

の述語も人魚構文名詞もいかなる音声的縮約も被っていないため、音形縮約には共通して当てはまらない。

4.2 Hopper & Traugott (2003) による文法化のクライン

Hopper & Traugott (2003) は、文法化には (32) で示すような方向性があるという一般化を提示した [4]。すなわち、内容語は最も文法化の度合いが低く、文法化が進むにしたがって、機能的な用法を獲得し、接語への変化を経て、最も文法化の進んだ形態が接語である、という仮説である。

(32) 内容語 (content word) → 文法的語 (grammatical word) → 接語 (clitic) → 接辞 (affix)

前節で言及したように、SSR 述語と人魚構文名詞はどちらも内容語としての意味を喪失し、機能的な意味を持った語に変化している。したがって、両構文の述語はともに機能語の段階にあると言える。ゆえに、人魚構文は、通時的にも繰り上げ構文と類似した文法化の過程にあると言える。

なお、3.2 節で言及したような、接語化した名詞を伴う人魚構文や、助動詞化・接語化した SSR 構文はこの限りではない。例えば、英語の助動詞 *will* は、本来「欲する」といった意味内容を持っていたが、現代英語では動詞としての活用を失い（脱範疇化）、環境によっては縮約されて *'ll* という接辞となる（音形縮約）。これと同様に、ビルマ語の例文 (30) の接語 *=lò* のような人魚構文では、脱範疇化を被っており、文法化のクラインにおいても接語の段階まで進んでいると言える。

5 結論

本稿では、人魚構文が、共時的・通時的側面の双方において、繰り上げ構文の一種として分析することができることを示した。3.1 節では、人魚構文が繰り上げ構文を判断する統語的テストに通ることを確認し、3.2 節では、表 1 にまとめたような形態的バリエーションがありながらも、通言語的に繰り上げ構文として扱える可能性を示した。4 節では、表 2 に示したように、Heine & Kuteva (2002) と Hopper & Traugott (2003) が提示した文法化現象の一般的特徴を基準として、人魚構文と繰り上げ構文が同様の段階にあることを確認した。本研究で示した名詞述語の繰り上げ構文は、繰り上げ構文の研究でも記述が未発展のタイプであるため、繰り上げ構文の類型論に対しても新たな可能性を提示した。

	繰り上げ構文	人魚構文
埋め込み述語の形態	不定詞	連体形（日本語、伊良部島方言、朝鮮語、ビルマ語、シダーマ語） 動名詞（アムド・チベット語、ベンガル語） 不定詞（タガログ語、タタール語、ロシア語） 動形容詞（クルク語）
主語の格標示	主格	主格（日本語、伊良部島方言、朝鮮語、アムド・チベット語、ビルマ語、シダーマ語、タガログ語） 属格（クルク語、タガログ語、ベンガル語） 与格（ロシア語、タタール語）

表 1 繰り上げ構文と人魚構文の形態統語的比較。

略号一覧. ACCOBL 対格-斜格、ADN 連体形、AF 行為者焦点、B パターン B ([1] 参照)、CONT 未然相、COP 繫辞、DAT 与格、DECL 終止形、EMP 強調、ERG 能格、F 女性、FOC 焦点、GEN 属格、INF 不定形、IPFV 未完了形、KO 格助詞 *=kò/gò* ([7] 参照)、LK リンカー ([6] 参照)、LOC 処格、LV 長音化母音、MOD 被修飾、NM 非男性、NMLZ 名詞化接辞、NOM 主格、NPC 名詞句接語、NPST 非過去、OBL 斜格、PF 完了体、PL 複数 PRED 述語形、PS 過去語幹、PROS 将然相、SG 単数、TOP 主題 VADJ 動形容詞。

		繰り上げ構文	人魚構文
Heine & Kuteva (2002)	脱意味化	✓	✓
	分布拡張	✓	✓
	脱範疇化	—	—
	音形縮約	—	—
Hopper & Traugott (2003)	内容語	✓	✓
	文法的語	✓	✓
	接語	?	?
	接辞	—	?

表2 繰り上げ構文と人魚構文の通時的比較。薄字の✓はその段階を終えていることを示す。?は周縁的であることを示す。

参考文献

- [1] Ebihara, Shiho. (2020). Amdo Tibetan. In Tsunoda, T., *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*. Comparative Handbooks of Linguistics, 6: 419–464. Mouton de Gruyter.
- [2] de Haan, Ferdinand. (2007). Raising as grammaticalization: the case of Germanic SEEM-verbs. *The Italian Journal of Linguistics*, 19: 129–150.
- [3] Heine, Bernd and Kuteva, Tania. (2002). *World lexicon of grammaticalization*. Cambridge University Press.
- [4] Hopper, Paul J. and Traugott, Elizabeth C. (2003). *Grammaticalization* (2nd ed.). Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge University Press.
- [5] Huziwarra, Keisuke. (2018). A contrastive study of external adnominal clauses in Japanese and Bangla. *Bangabidya: International Journal of Bengal Studies*, 10: 368–367.
- [6] Katagiri, Masumi. (2020). Tagalog. In Tsunoda, T., *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*. Comparative Handbooks of Linguistics, 6: 781–816. Mouton de Gruyter.
- [7] Kato, Atsuhiko. (2020). Burmese. In Tsunoda, T., *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*. Comparative Handbooks of Linguistics, 6: 557–604. Mouton de Gruyter.
- [8] Kawachi, Kazuhiro. (2020). Sidaama. In Tsunoda, T., *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*. Comparative Handbooks of Linguistics, 6: 679–736. Mouton de Gruyter.
- [9] Kim, Joungmin. (2020). Korean. In Tsunoda, T., *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*. Comparative Handbooks of Linguistics, 6: 283–332. Mouton de Gruyter.
- [10] Kobayashi, Masato and Tsunoda, Tasaku. (2020). Kurux. In Tsunoda, T., *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*. Comparative Handbooks of Linguistics, 6: 605–650. Mouton de Gruyter.
- [11] Langacker, Ronald W. (1995). Raising and transparency. *Language*, 71: 1–62. Linguistic Society of America.
- [12] Shimoji, Michinori. (2020). Irapu Ryukyuan. In Tsunoda, T., *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*. Comparative Handbooks of Linguistics, 6: 233–282. Mouton de Gruyter.
- [13] Taguchi, Chihiro. (2021). Mermaid Construction in Tatar. *Proceedings of the 164th Conference of the Linguistic Society of Japan*.
- [14] Tsunoda, Tasaku. (2020). *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance*. Comparative Handbooks of Linguistics, 6. Mouton de Gruyter.
- [15] 角田太作. (2011). 人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献. 国立国語研究所論集 1: 53–75.
- [16] 角田太作. (2012). 人魚構文と名詞の文法化. 国語研プロジェクトレビュー 7: 3-11. 国立国語研究所.